

## 稲作農業と家畜飼育

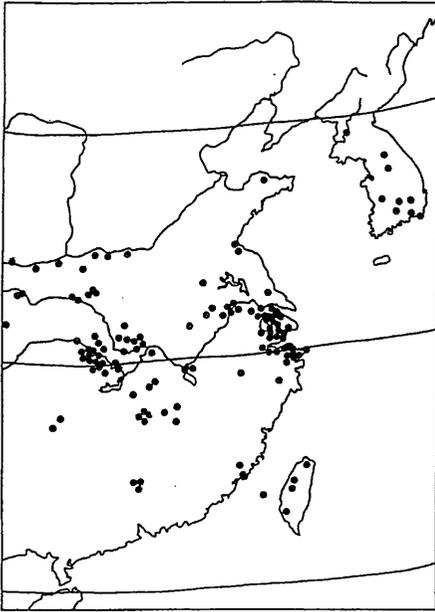
日本の伝統的な農耕文化においては、運搬や耕作などの役牛（馬）は別として、肉食用としての家畜飼育は行われていない。このため動物と農業の関係についての研究は、従来から希薄であった。その点、ヨーロッパや西アジア、インドなどで展開する畑作農耕文化の調査研究と比較すれば明白である。食料としての家畜飼育が行われていない特殊日本の農耕文化の形成過程を把握するために、東アジアの初期農耕文化遺跡で出土する、食料としての自然遺物を分析して、農耕と家畜飼育の関係についての検討を行いたい。

具体的な検討対象は、今日から4000年以前の中国と2500年以前の朝鮮の遺跡で出土した、食料に供されたと思われる動物と植物で、遺跡数にして400ヶ所以上に達する。

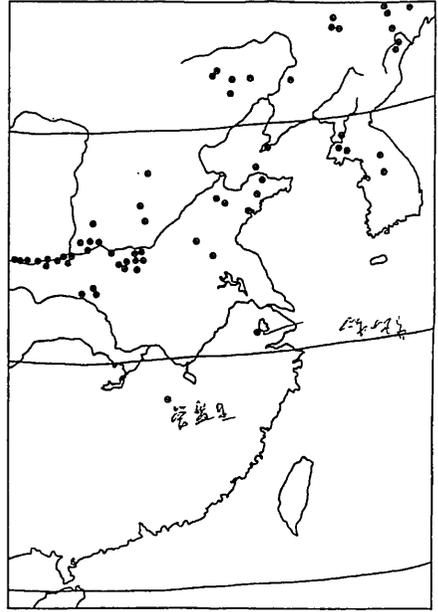
これら初期農耕文化期の食料資料を基に経年的な数量の変化を見てゆくと、次のような3種類の食料獲得戦略にまとめることができる。

- ① 選別的食料体系—長江流域の稲作文化  
水稲栽培を主体とする農耕で、ブタを飼育するもののその頭数は少なく、シカ科を中心とした狩猟と淡水魚類に動物性蛋白質の多くを依存する類型
- ② 多角的食料体系—黄河流域の畑作農耕文化  
アワ・キビを中心とする農耕で、ブタ、イヌ、ウシなど数種類の家畜を飼育し、狩猟動物も数種類に及ぶ類型
- ③ 網羅的食料体系—東北アジアの農耕文化  
穀物栽培や家畜飼育は低調で狩猟採集漁撈といった様々な分野の生業活動が営まれる類型

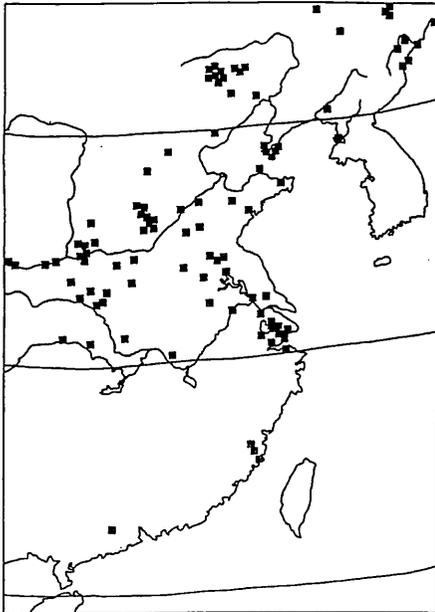
水稲栽培地帯に選別的な食料体系がみられるのは、水稲の生産性の高さ、栄養源、エネルギー源としての優位性からもたらされるものである。地力を回復させるための肥料を動物の排泄物に求める以前の段階においては、家畜飼育を維持するための膨大な飼料と、それを獲得するために投入されるエネルギーを、直接穀物栽培に振り向けることがもっとも効果的である。奈良時代のコメの収穫量は、ローマ時代のイギリスでの小麦の収穫量の10倍ほどに達する。水稲栽培を受容した弥生時代以降の日本の農民は、施肥以前の農業を高度に発展させたものであった。これは水辺での生態的な環境と最も効果的に適応させた生産形態であったとすることができる。



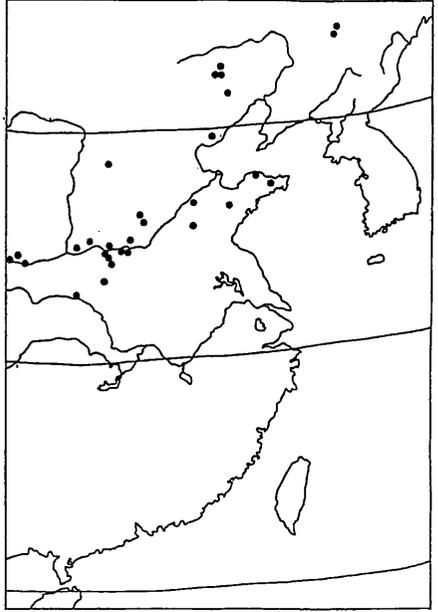
①コメ出土遺跡



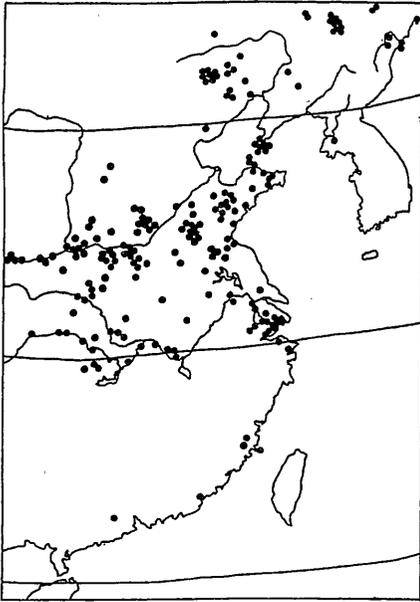
②アワ、キビ、モロコシ、マメ出土遺跡



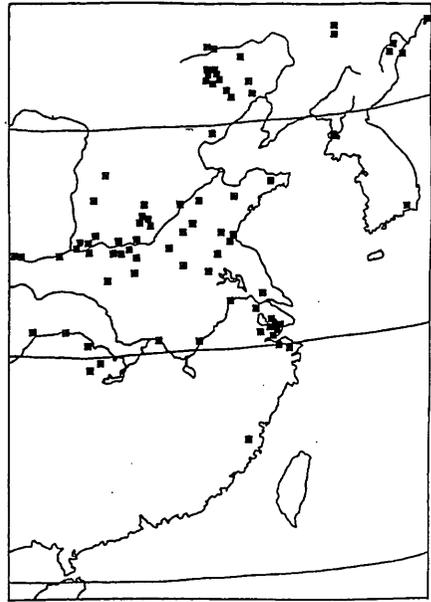
③イヌ出土遺跡



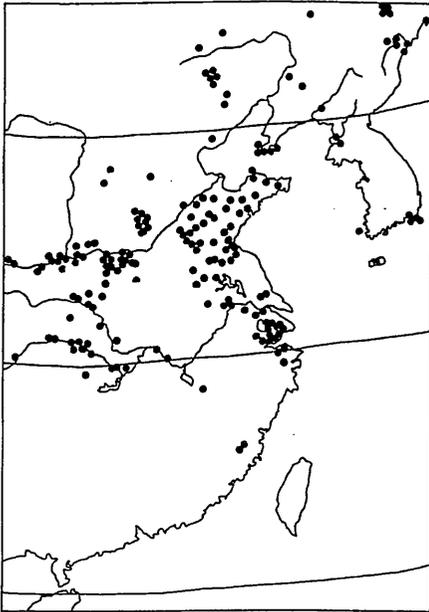
④ヒツジ出土遺跡



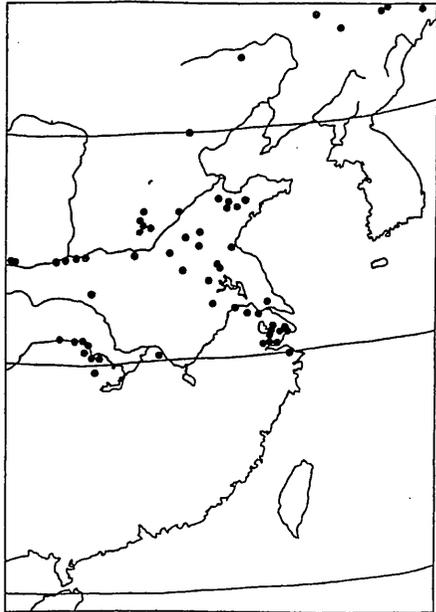
⑤ブタ出土遺跡



⑥ウシ出土遺跡



⑦シカ出土遺跡



⑧淡水魚出土遺跡

『21世紀農耕文化シンポジウム熊本大会予稿集』1992年